

氏 名	上 原 広 道 うえ はら ひろ みち
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 623 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 50 年 11 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	自己免疫疾患における lymphocyte subpopulation の研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 花 岡 正 男 教 授 前 川 暢 夫 教 授 深 瀬 政 市

論 文 内 容 の 要 旨

自己免疫疾患患者においては、体液性免疫ならびに細胞性免疫に関する種々の異常所見が報告されており、免疫学的機序がその病因に重要な役割を演じていることが示唆されている。

本研究は臓器非限局性自己免疫疾患とされる慢性関節リウマチ患者ならびに臓器限局性自己免疫疾患とされる橋本病およびバセドウ病患者について、抗体産生に関与するBリンパ球と、細胞性免疫に関与するTリンパ球の量的異常の有無を明らかにする目的で行なった。

表面免疫グロブリンの存在とヒツジ赤血球とのロゼット形成をそれぞれBおよびTリンパ球の marker として検索し、

次のような結果を得た。

慢性関節リウマチ患者

1) 末梢血リンパ球においては、Bリンパ球は百分率でも絶対数でも正常人と比較して有意に増加していた。Tリンパ球は百分率では正常人とほぼ同じ値を示したが、絶対数では有意に減少していた。

2) 関節液リンパ球においては、末梢血リンパ球と比較してBリンパ球の百分率は有意に減少していたが、Tリンパ球の百分率はほぼ同じ値であった。

橋本病およびバセドウ病患者

1) 橋本病およびバセドウ病患者末梢血においては、Bリンパ球は百分率でも絶対数でも有意に増加していた。

2) 橋本病ならびにバセドウ病患者において、末梢血のBリンパ球の絶対数と血清免疫グロブリン値、抗サイログロブリン抗体価あるいは抗マイクロゾーム抗体価の間には有意の相関は認められなかった。

3) 橋本病あるいはSLE患者血清に正常人リンパ球を incubate した時に、IgG 保有細胞の百分率の増加をもたらす例が少数認められ、血清中の抗リンパ球抗体の存在も想定されたが、このような例の末梢血リンパ球のIgG 保有細胞の百分率は必ずしも高くなかった。

論文審査の結果の要旨

最近ヒトのリンパ球にもTおよびB細胞の二種類ありその免疫学的機能の分化が盛んに論議されている。そこで著者はこれら両細胞の自己免疫性疾患に於ける変化を知る目的で慢性関節リウマチ患者の血液および関節液リンパ球について表面免疫グロブリンとヒツジ赤血球とのロゼット形成をそれぞれBおよびTリンパ球の marker として検索した結果、血液ではB細胞は百分率でも絶対数でも正常人に比較して有意に増加し、Tリンパ球は百分率では正常、絶対数は有意に減少していた。一方関節液リンパ球は血液リンパと比較して百分率ではBリンパ球は有意の減少、Tリンパ球はほぼ同値であった。

また橋本病およびバセドウ病患者についての検索結果では血液Bリンパ球は百分率でも絶対数でも有意に増加していた。またこれらの末梢血のBリンパ球の絶対数と血清免疫グロブリン値、抗サイログロブリン抗体価等の間には有意の相関は認められなかった。以上自己免疫疾患について全身性のものと臓器限局性のものについてリンパ球の subpopulation の変化を明らかにしたもので、今後この種疾患に於て果すリンパ球の機能の解明に資する所大である。

よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。